

地下鉄入口に置かれた乳歯

閑 妖 （訳 横田勤・萩田麗子）

エマとフランクはロンドンの地下鉄で出会い一目ぼれをして電撃結婚した。娘のフラニーが生まれ、一家三人は楽しく暮らしていた。毎朝、フランクが車でエマを家から二つ目の通りの交差点にある地下鉄のキングス・クロス駅まで送り、娘を学校に送り、そして出勤していた。

しかし、だんだんエマが夫に不平をこぼすようになった。夫が勤務地に近い場所に家を買う能力がないことを非難した。何度も口論となり、これまでの二人の仲睦まじさは失われた。フランクは乱暴な態度でエマの叱責に応じ、とうとう二人は協議離婚の書類にサインをした。

離婚して二日目の早朝、エマはいくつもの荷物を引きずって、十年間生活した家から離れようとしていた。娘の部屋に入ると、五歳になったフラニーが夢の中から目を覚まし、ごろりと寝返りをうって立ち上がり、枕の下からある物を取り出すと母親の手の中に入れた。それは一個の小さな乳歯だった。エマは娘を撫でながら「ベイビー、大きくなったのね」と言った。彼女はたった今抜け替わったばかりの娘の歯をしっかりと握りしめ、家を出た。

フラニーは母親が行ったのに気づいた。彼女は、パパとママきっとけんかをしたのだ、それでママは一人で地下鉄の駅に行ったのだ、と思った。

フランクが車で娘と駅の付近まで来たとき、突然ドカンと大きな音がし、それから車が警察に止められた。なんと、ロンドンの地下鉄がテロの襲撃に遭ったのだ。

フランクは車を降りて状況をつぶさに見た。そして緊張した気持ちを隠し、ロンドンではオリンピックの成功を祈ってみんなが一日休みになったので、今日は

学校へ行く必要がないのだ、と娘に言った。

帰宅するとフランクは家のドアをしっかりと閉じ、黙ってテレビのニュースを見た。

フラニーは、ママが帰ってきたらすぐにハリー・ポッターのゲームをしよう、ママと二人で一緒に、ヴォルデモートに扮したパパを追っかけて遊ぼう、遊んでいるうちにママの手をパパの手につながせて、二人を仲直りさせよう、と思っていた。

空が暗くなっても母親は帰ってこなかった。

フラニーは駅の入り口まで行って母親を待っていたかった。だが、ずっと黙ったままのフランクは手を広げ、悲しみを浮かべた顔つきで、「ベイビー、ママは帰って来られないんだ」と言った。

二日目の朝、通りは異常なほどの静けさだった。駅の近くまで行ったとき、フラニーは駅の入り口が閉鎖されているのを知り驚いた。

フラニーは心の中で思った。「地下鉄の駅はとっても不思議なところで、ママはここから会社に行き、ハリー・ポッターはここから魔法の学校へ行くんだ…」

フラニーは地下鉄の駅からは世界中のどんなところへでも行くことができるのだと思っていた。でも、いま地下鉄の駅は閉鎖されているからママは帰ってこれなくなった、とフラニーはとても悲しんだ。

爆発から五日目、地下鉄は再開した。フラニーは喜びの声をあげて父親に言った。「地下鉄が開いたよ。ママはすぐに帰って来る」

フランクは娘にどのように答えていいか分からず、苦しみと後悔の念で胸がいっぱいになった。

爆発があった日は彼と妻が離婚の署名をして二日目であった。彼女が大小の包みやバッグを引っ張りながら駅の方へ歩いていくのを見ていたが、彼は彼女を手助けしようとはしなかつた。彼は、妻がささいなことで自分とすぐにけんかをしたがるのは、経済的条件が自分より優れている男が彼女を待っているからに違いない、と思いこんでいたのだ。

フランクは、地下鉄爆発による死傷者名簿を、あちらこちらとくるったように

見て歩いた。

五日後、不吉な思いがますます強くなった。

フラニーには父親の沈黙の表情の中に、どのような苦しみが隠されているのかを理解することはできなかった。彼女は母親が「母親というのははだれでも天の仙人の化身で、子供の乳歯をすべて集めたなら、この世のものを超越したすごい力を持つことができる」と言っていたことを覚えているだけだった。

その日の夕方、フラニーが家に帰っても母親の姿は見えなかった。彼女は父親に、地下鉄の駅を見につれて行ってくれと懇願した。

キングス・クロス駅はもうきれいになっていた。フランクは駅の入り口付近の掲示板の前に来ると、エマと一緒に写っている写真を貼り付けた。そして写真の上に「エマ、君はどこにいる。無事なのか？ 教えてくれ、別れたあの日、君はどうして地下鉄に乗らなければならなかったのか？」と書いた。

掲示板にはたくさんの探し人の広告が貼ってあった。多くの市民が最後の希望を抱いてここに来て広告を貼り、行きかう人がこれを見て、家族の消息を知らせてくれることを希望していた。

フラニーは、自分の乳歯が少しでも早く抜けてしまうようにと、いろいろな方法を考えていた。彼女はわざと、ぐらぐらしている歯で硬い骨をかじったりサトウキビを噛んだりした。三日後、二つ目の乳歯がやっと抜け落ちた。フラニーは歯を持って行ってフランクに言った。「もう一度駅へ行きたい、ママが駅を出たらすぐに私の歯が手に入るようにしておきたいの」

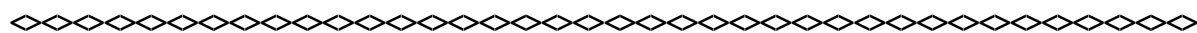
フランクはフラニーに、ママはもう帰って来ない、と言おうとした。しかし口に出せなかった。彼が娘を連れて駅の入口へいくと、掲示板を多くの人を取り囲んでいて、涙を流している者も何人かいるのに気付いた。

近づいてみると、そこには「エマ」と署名した紙が貼ってあり、こう書いてあった。私は涙をこらえて角を曲り、地下鉄に急ぎました。そしてちょうどやって来た電車に乗りました。しかし私はそのとき、その電車は私たちが最初に出会ったときに乗り合わせた電車より、五分早い電車だということに気づきました。それで私は電車を降りました。その時です、大きな爆発音が聞こえたのは……。私は驚き、どうしたらいいのか分からぬまま逃げました。逃げながら今までにないほど家を恋しく思いました。続けて聞こえてくる爆発音の中で、私はあなたの良いところばかりを思い出していました。死を目の前にして、私にとって最も大

事なものは、あなたと娘なのだということがわかりました。私は爆発では死にま
せんでした。でも本当に「再生」を経験したのです。昨日友達から、あなたが掲
示板の所で私を探していると聞きました。それまでずっと私は、ただあてもなく
歩き廻っていました。あなたは一羽の傷ついた鳥が巣に帰って来るのを、受け入
れたいと思ってくれますか。もしそう思ってくれるなら、どうか掲示板の前に何
か赤いものを置いて下さい。もしそう思ってくれないのなら、白い物を置いて下
さい……」

フランクは驚いた。そして気づいた。掲示板の下にはすでにいろいろな赤色の
ものがあつた。赤いバラ、赤い紙、赤い帽子……フランクは群衆の前に出て、涙
を浮かべながら、娘の血の付いた乳歯を赤いリボンに結び、エマが文章を書いた
紙の上に置いた。

(『中国微型小説排行榜(2012)』百花洲文芸出版社, 南昌市, 2013, pp. 105-107.)



(中国語原文) **地铁站口留乳牙** 闲妖

爱玛和福兰克在伦敦地铁上一见钟情并闪电结婚。生下女儿布兰妮后，
一家三口过得其乐融融。每天早晨，福兰克开车将爱玛送到离家两个街口外
的国王十字地铁站口，然后把女儿送到学校，自己再去上班。

后来，爱玛渐渐开始抱怨老公，责怪他不能在离她上班近一点的地方买
套房子。一次次的争吵，使他们失去了往日的恩爱。福兰克用粗暴的态度来
应对爱玛的指责，终于，他们在离婚协议上签了字。

离婚后的第二天清晨，爱玛拖着一大堆行李准备离开生活了十年的家。
爱玛来到女儿的房间，五岁的布兰妮从梦中醒来，她一骨碌爬起来，从枕头
底下抓了一个东西放到妈妈的手心里。爱玛一看，是一颗小小的乳牙。爱玛
摸了摸女儿：“宝贝，你长大了。”爱玛将女儿换下的第一颗牙紧紧地捏在手
心，出了门。

布兰妮发现妈妈走了，她知道，爸爸妈妈肯定吵架了，妈妈提前独自步
行去了地铁站。

福兰克开车和女儿来到地铁站附近时，突然听到“轰隆”一声，接着，汽车被警察拦住。原来，伦敦地铁遭到恐怖袭击。

福兰克下车察看情况，他克制住紧张情绪告诉布兰妮，伦敦在庆祝申奥成功，所有的人都放假一天，今天不用上学。

回家后，福兰克把房门关得紧紧的，闷声不响地看电视新闻。

布兰妮想，等妈妈一回来就玩哈利·波特的游戏，母女俩一起追逐扮演伏地魔的爸爸。玩着玩着，她就会将妈妈的手交给爸爸，让爸爸妈妈和好。

直到天黑，妈妈都没有回来。

布兰妮要到地铁口去等妈妈，一直沉默的福兰克摊开手，满脸悲伤地说：“宝贝，她不会回来了。”

第二天早晨，街道上静得出奇。走到地铁站附近，布兰妮吃惊地发现，地铁站口居然封闭了。

在布兰妮心里，地铁站极为神秘，妈妈从这里去上班，哈利·波特从这里出发到魔法学校……她觉得，地铁站可以通往世界上任何地方。现在地铁站关闭了，妈妈回不来了，布兰妮万分忧伤。

爆炸后的第五天，地铁站重新开放。布兰妮欢呼着对爸爸说：“地铁站开了，妈妈就要回来了。”

福兰克不知该如何回答女儿，他的内心充满了痛苦和悔恨。

爆炸发生的当天，是他和妻子签字离婚的第二天，他看着她拖着大包小包朝地铁站方向走去，却没有上前帮她。他断定，妻子之所以喜欢就一些小事情跟他争吵，肯定是有有一个经济条件比他优越的男人在等着她。

福兰克发疯一样四处打听在地铁站爆炸中伤亡的人员名单。

五天后，不祥的感觉越来越强烈。

布兰妮不理解爸爸沉默的表情下掩藏着什么的痛苦，她只记得妈妈说过，每个母亲都是天仙的化身，如果收集全了孩子换下的乳牙，她就会拥有超凡的力量。

这天傍晚，布兰妮回到家，依然没有看到妈妈的身影，她央求爸爸带她去地铁站看看。

国王十字地铁站已经焕然一新。福兰克来到站口附近的启事栏前，张贴了一张带有爱玛照片的寻人启事。上面写着：“爱玛，你在哪里，你还好吗？告诉我，分手那天，你为什么还要去坐地铁？”

启事栏里贴了许多寻人广告，许多市民抱着最后一线希望来这里张贴启事，希望过往的行人能带来亲人的消息。

布兰妮想了许多办法，好让自己的牙齿快些脱落下来。她故意用松动的牙齿啃硬骨头，甚至去嚼榨糖。三天后，第二颗牙齿终于脱落。布兰妮拿着牙齿福兰克说：“我要再去一趟地铁站，让妈妈在出站的第一时间得到我的牙齿。”

福兰克很想告诉布兰妮，妈妈不会再回来了，但是，他说不出口。他带着女儿来到站口，发现启事栏那里围着许多人，有的人还流着泪。

他走近一看，那里竟有一张署名爱玛的字条，上面写道：“我知道，那天你一直站在我身后，我以为你会最后送我一次，可是你没有。我强忍着眼泪拐过弯，赶到地铁站，挤上一列刚到站的车。转念之间，我突然觉得，这趟车比我们相遇的那班车早了五分钟。于是，我下了车。就在这时，巨大的爆炸声响了……我惊慌失措地跑着，我前所未有的想家。在接连的爆炸声里，我想的全是你的好：在与死亡擦肩而过时，我最难舍的是你和女儿。我没有在爆炸中丧生，却实实在在经历了一次重生。我一直徘徊着，直到昨天有朋友告诉我，你在张贴启事寻找我。你愿意接受一只受伤的鸟儿归巢吗？如果愿意，请在启事栏前放上一件红色的东西：反之，就放白色……”

福兰克吃惊地发现，启事栏下已经有了各种红色的东西：红玫瑰，红纸条，红帽子……他挤到众人面前，含泪将女儿带血的乳牙系上红丝带，放在了爱玛的字条上。

